

奈良の若草山と云ふは、仁德帝の後の陵にて、鷺の陵と云ふとなり、近年並河五一郎吟味ありて、其上に標ありと云ふ、其奥に鷺の谷と云ふ處あり。

〔大日本史 禮樂四〕孝德大坂磯長陵、在石川郡、關西五町、即陵地、據此鷺陵蓋謂此也。

〔蜻蛉日記下〕五月〇四年康保にもなりぬ、略中十日、うちに村の御薬の事ありとの、しるほぞもなくて、廿日のはぞにかくれさせ給ひぬ、略中みさきや何やどきくにどきめき給へる人々いかにと思ひやり聞ゆるあはれなり、やうく日頃になりて、貞觀殿御方原尙侍藤登子にいかにを聞えけるついでに、

世の中をはかなきものとみさきのうもるゝやまになげくらんやそ、御かへりごといとかなしげにて、

おくれじとうきみさきに思ひいる心はしでのやまにやあるらん

〔源氏物語須磨院〕○桐帝の御はかをがみ奉りたまふとて、北山へまうでたまふ、略中御山に參り侍るを、御ことづてやときこえ給、略中御山にまうで給て、おはしまし、御有さま、唯目の前のやうにおぼし出らる、略中御はかは道の草しげくなりて、わけ入給ほぞいとさ露けきに、月も雲がくれて森の木だちこぶかく心すごし、

〔和訓栞三〕みさき 日本紀に、陵又山陵をよめり、御狭々城の義なるべし、

〔古事記傳十七〕御陵は美波加と訓べし、萬葉二二十に、八隅知之、和期大王之恐也、御陵奉仕流、山科乃、鏡山爾云々、師眞淵茂の考に、古は天皇の山陵をも、御墓とぞ云つらむ、此も御陵とは書たれど、みさきとは訓がたく、必みはかと訓べければなりどあり、書紀仁德卷推古卷などに、難波荒陵と云地名もあり、源氏物語須磨卷に、院の御はかとあり、又御山ともあり、古書にも、御又美佐邪紀と云も古き稱なり、和名抄に山陵美佐々岐、また諸陵寮美佐々岐乃豆加佐とあり、但